



# 日本計量生物学会 ニュースレター

1. 巻頭言	-1	7. 2022 年度年会・チュートリアルのお知らせ	-5
2. 試験統計家認定制度について	-2	8. 2022 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	-5
3. 2021 年度理事会議事録	-2	9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	-5
4. 2021 年度統計関連学会連合大会報告	-3	10. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	-7
5. WNAR 年会への参加報告	-4	11. 2022 年度学会賞および功労賞候補者推薦の お願い	-8
6. 2021 年度計量生物セミナーのお知らせ	-5	12. 編集後記	-8

## 1. 巻頭言「コラボレーションっていう（いわれる）けど…」

森田 智視（京都大学）

コロナ禍が始まってもうすぐ二年になろうとしています。「あの時は大変だったね」と言える日が早く来ればよいのですが、旅行にも外食にも行けずいわゆる気分転換の一つもできない状況、もう少し何とかならないかと思う日々です。ただ悪いことばかりではないと思います。そんな時だからこそいったん立ち止まって今までの人生を振り返り、これから（残り）の人生をどのように生きていくか落ち着いて考える時間をもつこともできるのではないのでしょうか。

わたくし自身これまで臨床試験の中で仕事をしてきました。臨床試験の目的はもちろんよりよい治療を開発して患者さんに提供することです。その臨床試験において統計家という立場で何ができるか、あるいは何をすべきなのでしょう。2013 年 2 月に日本臨床試験研究会（現在は学会）の第 4 回学術集会総会が北海道で開催されました。シンポジウムの一つ「臨床試験実施基盤の将来を語ろう：10 年先はどうなっているか」で生物統計家の役割について自分自身の思うところを話す機会を頂きました。演台から 5 メーターほど先に大橋靖雄先生が座っておられるその場で「(奥野忠一先生のお言葉である)生物統計家はよき“butler (執事)”であれ、はいったい何を意味しているのだろうか？いまだその真意の理解には至っていない。“Servant (召使い)”でないことは分かっている。」と(超)生意気な発言をしました。今考えると冷や汗ものです。そして生物統計家のことを「臨床試験を進めていく上で役に立つ存在だろう。しかし、求められている役割をしっかりと果たせているのだろうか？人数が少ないゆえ（我慢して）つきあ

ってもらっているだけではないだろうか？」と、何偉そうなことを…と思われるような発言をしました。その上で私見として 5~10 年後の生物統計家の役割を「生物統計家をひとまとめにせず、“分業化（役割分担）”が必要なかもしれない。1) 臨床研究者と一緒に試験実施していく人、2) 臨床試験のシステム構築に力を注ぐ人、3) 臨床統計的手法の開発に注力する人、1)~3)すべてあるいは組み合わせをやっていく人」と述べました。

1) の場合、大学や病院では医師と、企業では臨床開発担当者と近い距離で協働することになります。やはりいろいろな人がいて、統計家のことを単なる「計算屋」と（多かれ少なかれ）思っている人が実際に（結構）いると思います。仕事ですからと割り切ることもありかもしれません。計算だけしてそれで終わりというのでは達成感はほとんどなく時にむなしい気持ちになることもあります。しかしそんな仕事であったとしても粘り強く続けることは大切かもしれません。地道にしっかりと仕事を続けているとやはり人は見ているもので、一緒に仕事をする大切なパートナーだと思ってくれる人が必ず出てきます。そういった人たちは何物にも代えられない一生の財産だと思います。その時に重要になってくるのが我々自身の専門家としての統計的な知識やスキル、経験ではないのでしょうか。単に統計家というだけではなく、統計においても自分のアイデンティティとなるような領域を持つことは極めて大切であり、理想かもしれませんが得意とする疾患領域をもつことができればと思います。

今のコロナ禍がおさまりウイズコロナに移行すると物事がものすごいスピードで再稼働しそうです。その動きに翻弄されてしまうところももちろん出てくると思いますが、どこか一部分でもぶれることなく自分が大切と思う（える）ことを着実に実践していくことが今後ますます大切になってくるのではないのでしょうか。若い

世代の人たちのためにそういった環境を整え提供していくことが“年配”統計家の役割であり、これこそ指導いただいた諸先輩方への恩返しだと思います。このサイクルを大きく回し、また続けられるよう若き日の熱い思いを今一度取り戻し緩んだアクセルを踏みなおしたいと思えます。

## 2. 試験統計家認定制度について

手良向 聡, 安藤 友紀, 大門 貴志, 長谷川 貴大 (試験統計家認定担当理事)

2017年4月に開始しました「試験統計家認定制度」では、臨床研究の統計的デザインと解析・統計家の行動基準に関し深い知識を有し、実践している者を試験統計家 (trial statistician) として認定します。臨床研究の科学的かつ倫理的な質を高めることで人々が有効かつ安全な医療の恩恵を受けること、併せて計量生物学の進歩と発展を目指しています。規則・細則、Q&A、審査基準等の詳細については、学会HPをご覧ください。

試験統計家は、臨床研究のデザインと解析の科学的・倫理的側面の責任を負う「責任試験統計家」、臨床研究のデザインと解析に関連する実務を行う「実務試験統計家」の2種類の区分からなり、2021年4月時点で責任試験統計家31名、実務試験統計家51名が認定されています。

認定された試験統計家から、次のような一言が寄せられています。『慶應義塾大学病院では、AMED 生物統計家育成事業の修了生を積極的に雇用しています。彼らの目標のひとつは、試験統計家の資格を取得することです。仕事をする上で目標があることは大変よいことなので、試験統計家の資格を取得しやすい環境を構築していきたいです。』(責任試験統計家：慶應義塾大学・佐藤泰憲)、『メール署名、名刺に「実務試験統計家」

と記載し、活用しています。自身の専門性を明示することで、より最適な形で様々なプロジェクトに参画できる機会が増えました。企業勤務の方にもおすすめできる資格です。』(実務試験統計家：味の素株式会社・高田理浩)

今後の予定は以下の通りです。なお、2022年度の認定申請のためには2019年4月～2022年3月の間に開催された認定講習会への参加が必須です。

- ・2021年11月20日(土)、12月18日(土)：2021年度 認定講習会 (オンライン開催)
- ・2022年3月：2021年度申請分 責任・実務試験統計家認定
- ・2022年5月～7月：2022年度 責任・実務試験統計家認定申請受付

すでに試験統計家認定を受けられた方については、更新のために有効期間内(5年間)に30単位が必要です。単位が付与される学会・セミナー(日本計量生物学会年会、計量生物セミナー、計量生物学講演会、統計関連学会連合大会、IBC、EAR-BC)に参加された場合は、参加証等の証明書が必要となりますので、各学会等で取得後、認定の更新時まで保管をお願いいたします。

## 3. 2021年度理事会議事録

寒水 孝司, 高橋 邦彦 (庶務担当理事)

○2021年度 第4回対面(Web)理事会

日時：2021年(令和3年)9月6日(月)  
17:30~18:45

場所：東京理科大学工学部情報工学科寒水研究室を本部とするZoom会議

出席：松井, 安藤, 大庭, 川口, 五所, 柴田, 寒水, 大門, 高橋, 田栗, 手良向, 長谷川, 服部, 船渡川, 松山, 松浦(監事), 山本(監事)

欠席：大森

定款第35条に従い、定足数を満たしていること

を確認した後、定款第34条に従い、松井会長を議長として議案を審議した。

第1号議案 入会申し込み者の承認

議長より、5月1日(土)から8月24日(火)の期間に申し込みのあった21名と1社の入会申し込み者が報告された。審議の結果、全員一致をもって承認された。

第2号議案 評議員の補充

議長より、佐藤俊哉氏と山中竹春氏(評議員(社

員))の退会に伴い、定款第12条の定めにより、評議員の地位を喪失することが述べられ、それに伴う欠員の補充方針について諮ったところ、審議の結果、補欠の評議員(2名分)の補充は行わないことが全員一致をもって承認された。

#### 第3号議案 40周年記念事業

議長および服部理事より、40周年記念事業の企画の実施方針について報告され、審議の結果、承認された。

#### 第4号議案 2021年度計量生物セミナー

田栗理事より2021年度計量生物セミナーの企画が提案され、審議の結果、承認された。

第5号議案 日本疫学会「プレセミナー」の共催  
田栗理事より日本疫学会「プレセミナー」を共催することが提案され、審議の結果、承認された。

#### 報告事項

##### (1) 庶務

退会者、会員種別変更、会員数(8月24日時点)、宛先不明者、Zoomの契約の更新、取材依頼、登記関連が報告された。

##### (2) 会報

136号の発行(2021年7月下旬)と137号の発行予定(2021年11月下旬)が報告された。

##### (3) 編集

「計量生物学」の発行状況と投稿状況が報告された。

##### (4) 会計

本部送金(2021年度第1回目)・対象会員名簿送付、2020年度会計の補足、年会チュートリアル収支の応用統計学会との按分、会計に関する月次打ち合わせが報告された。

##### (5) 企画

2021年度統計関連学会連合大会、オンライン企画委員会、2022年度年会特別セッション案、2022年度統計関連学会連合大会企画セッション案が報告された。

##### (6) 広報

学会HPの修正の方針が報告された。

##### (7) 試験統計家認定

試験統計家認定(2021年度)、認定講習会(2021年度)、試験統計家認定制度に関する広報活動が報告された。

## 4. 2021年度統計関連学会連合大会報告

田栗 正隆, 安藤 友紀, 川口 淳, 五所 正彦, 長谷川 貴大(企画担当理事)

2021年度統計関連学会連合大会は、2021年9月5日(日)から9日(木)にかけて開催されました。当初は長崎大学文教キャンパスでの開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、完全オンライン開催となりました。参加者数は市民講演会が207名、チュートリアルが384名でした。また、本大会参加登録者数は811名と盛会になりました。日本計量生物学会からは日本計量生物学会シンポジウム、日本計量生物学会奨励賞受賞者講演の2つの企画セッションが行われました。

9月7日(火)の午後に行われた日本計量生物学会シンポジウム「リアルワールドエビデンスを指向した反事実因果アプローチの実践と課題」では、リアルワールドエビデンスを指向した因果推論手法の最近の展開を、3つの異なる臨床的文脈から解説され、議論が行われました。はじめに篠崎智大氏(東京理科大学)から、リアルワールドエビデンスとして目指すもの、さらに本シンポジウムで取り上げられる各推測アプローチの概略を整理されました。次に、田栗正隆氏

(横浜市立大学)から、従来の交絡調整をした観察研究データの解析とは大きく異なり、標的臨床試験を念頭に予めデザインされる観察研究データを用いた仮想的な無作為化臨床試験を模倣する方法論が紹介されました。萩原康博氏(東京大学大学院)からは、臨床試験のEstimandを動的治療レジメンで定義し、リアルワールドエビデンスを指向したデータ解析として提案された二段階ランダム化デザインと確率的動的治療レジメンを応用した統計解析手法について述べられました。最後に大前勝弘氏(国立循環器病研究センター)より、ある動的治療方針に、静的治療や別の動的治療方針に取って代わる価値があるかどうかの意思決定を行うための方法では、正則な推定量が存在しないなど幾つかの課題が残っており、実用的な推定最適治療方針に関する評価方法の追求の必要性が述べられました。

9月7日(火)の午後に、日本計量生物学会シンポジウムに続いて2021年日本計量生物学会奨励賞受賞者講演が行われました。今回の奨励賞受賞者は萩原康博氏(東京大学大学院)であ

り、萩原氏からの講演がありました。萩原氏の「構造ネスト制限付き平均損失時間モデルの g 推定法による時間依存性治療の効果推定」では、時間依存性交絡を適切に調整し、時間依存性治療の効果推定の際に重要な役割を果たしてきた構造ネストモデルの g 推定法を取り上げ、

生存時間アウトカムに対する時間依存性治療の効果推定する有用な手法の提案が説明されました。受賞者である萩原氏の今後のさらなるご活躍を祈念いたします。

## 5. WNAR 年会報告

田栗 正隆, 安藤 友紀, 川口 淳, 五所 正彦, 長谷川 貴大 (企画担当理事)

6月14日～16日にIBSのWNAR(北米・カナダ西海岸リージョン)の年会在オンラインで開催されました。2019年度に引き続き、日本リージョン(日本計量生物学会)も共催で参加しま

した。日本リージョンからは「Advances in ecological data modelling」, 「New directions in radiation epidemiology」の2つの招待セッションが提案・実施されました。

### オーガナイザー報告

Advances in ecological data modelling

オーガナイザー：島津秀康 (Loughborough University)

昨今、生態・環境関連分野でもデータの複雑化、大規模化が加速しています。そのようなデータから、解釈可能かつ当該分野へ有益な情報を明らかにする、現象に肉薄したモデルをいかに構築できるかがカギとなることが少なくありません。本セッションでは、深谷肇一博士(国立環境研究所), Dr Rafael Moral (Maynooth University, Ireland), ソルヴァング比呂子博士(Institute of Marine Research, Norway), Professor

Grace Chiu (Virginia Institute of Marine Science, USA)の4人の講演者を迎え、ご自身の研究から当該分野でのチャレンジを多角的に紹介いただくとともに、モデル構築のアプローチを個体数推定からエコシステムの評価の問題、また様々な環境要因との関連まで幅広く議論いただき、オンラインでの質疑応答も盛況のうちにセッションを終えました。

New directions in radiation epidemiology

オーガナイザー：三角 宗近 (放射線影響研究所)

本招待セッションでは、4名の演者が放射線疫学の最新の方法論と新たな研究の方向性について報告しました。まず、三角から、放射線疫学研究の特徴とその最大規模のコホート研究である日本人原爆被爆者研究を紹介し、これまでと現在の放射線影響研究の事例と方法論について説明しました。Tekwe氏(Indiana University)からは、放射線疫学特有の放射線量という曝露因子に、対象者の被爆位置についての不確実性に起因する古典的な測定誤差と線量推定体系に起因するBerkson誤差の2種類の測定誤差を考慮して放射線による疾患リスクの推定を行う方法論が報告されました。循環器系疾患をエンドポイント、脂質異常症など原爆被爆者の臨床データを操作変数として、データから測定誤差の大きさも推定できる方法論を紹介されました。Kaiser氏(Helmholtz Zentrum München)から

は、多段階発がん数理モデルを疫学データに適合することで、分子生物学的な発がん経路と放射線の関連を探る研究と、そのアプローチが化学物質を含む多くの発がん物質のリスク解析を統合して取り扱うAdverse outcome pathway (AOP)という概念に対応しやすく、AOPに基づいた新しいアプローチの可能性を示されました。古川氏(久留米大学)からは、特に放射線防護の観点から、放射線感受性の違いを考慮するためにfrailtyモデルを用いたがん罹患リスクへの放射線影響の年齢や被爆時年齢による修飾を検討する方法が紹介されました。オンライン開催で、セッション後も録画を見ることができたため、Liveセッションの後も質問を受けるなど、WNAR会員に日本人原爆被爆者のデータや放射線疫学について興味を持って頂くいい機会となりました。

## 6. 2021 年度計量生物セミナーのお知らせ

田栗 正隆, 安藤 友紀, 川口 淳, 五所 正彦, 長谷川 貴大 (企画担当理事)

2021 年度計量生物セミナーを 2022 年 1 月 21 日 (金), 22 日 (土) にオンライン開催いたします。今回のテーマは「**相関のあるデータの解析**」で、統計数理研究所 医療健康データ科学研究センターとの共催になります。Ruwanthi Kolamunnage-Dona 氏 (University of Liverpool) と Virginie Rondeau 氏 (INSERM, Bordeaux University) を招待しての国際セッションも行います。以下に概要を記載します。会員の皆様の奮ってのご参加をお待ちしています。

テーマ: 相関のあるデータの解析

日時: 2022 年 1 月 21 日 10:00~17:30, 22 日 10:00

~12:15 (国際セッションは 14:40 開始予定)

場所: Zoom によるリモートセミナー

参加登録方法: オンラインポータルサイト (後日公開予定) から申し込み

参加費: 日本計量生物学会員 (一般) 5,000 円

日本計量生物学会員 (学生) 1,000 円

日本計量生物学非会員 (一般) 10,000 円

日本計量生物学非会員 (学生) 4,000 円

定員: 500 名

オーガナイザー: 土居正明 (京都大学), 五所正彦 (筑波大学)

詳細: 学会 HP

<https://www.biometrics.gr.jp/index.html>

## 7. 2022 年度年会・チュートリアルのお知らせ

田栗 正隆, 安藤 友紀, 川口 淳, 五所 正彦, 長谷川 貴大 (企画担当理事)

2022 年度日本計量生物学会年会およびチュートリアルを, 2022 年 5 月 13 日 (金) 及び 14 日 (土) に 東京理科大学葛飾キャンパス ([https://www.tus.ac.jp/access/katsushika\\_campus/](https://www.tus.ac.jp/access/katsushika_campus/)) で開催予定です (応用統計学会と共催)。2022 年度も一般公演として口頭発表及びポスター発表を募集する予定ですので, 是非とも講演申し込み

をご検討下さいませようよろしくお願いします。今年度も 40 歳未満の若手の正会員・学生会員を対象に「若手優秀発表賞」の表彰を行う予定です。セッションやチュートリアルの内容, 講演及び参加申し込み等の詳細については, 後日, 学会 HP (<https://www.biometrics.gr.jp/>) 及びメーリングリストでご案内します。

## 8. 2022 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

土居 正明, 船渡川 伊久子 (統計関連学会連合大会プログラム委員)

2022 年度統計関連学会連合大会は成蹊大学 (東京) において 2022 年 9 月 4 日 (日) ~9 月 8 日 (木) の日程で開催されます。チュートリアルセッションおよび市民講演会, 企画セッション, 一般演題

に加えてコンペティションなどを予定しています。詳細は未定ですが, 奮ってご参加をお願いいたします。

## 9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

### 9.1 医学研究者の良きパートナーを目指して

アカデミアで臨床研究の統計解析に携わって約 8 年が経ちました。私はこれまで, よく言えば医療関係者にごく近いところで研究支援をしてきました。本稿では, 特に目立った経歴があるわけでもない私の, これまでの個人的な経験や感じた事を述べてみたいと思います。この短報が大学病院や研究所で一人統計家として活動している方, ARO や市中病院で統計解析担当者として所属している方に, 同じような立場の者とし

室谷 健太 (久留米大学バイオ統計センター)

て少しでも参考になれば嬉しいです。

我々は統計支援を申し込まれてから医学研究者と対面します。私ははじめての相手と会うとき, この相談者は「私」に相談したいから来てるわけではない, と肝に銘じるようにしています。たぶん相手は自分の疑問を解決してくれるなら誰でもいいと思っています。でも, せっかくならいいい気分でも帰ってもらいたいものです。望むべくは「私」のファンになってもらいたいの

す。

そのためには相手が知りたいことだけを素早くピンポイントに解決してあげることが重要と思います。はじめての案件であるならスピードに特にこだわります。スピーディなレスポンスは経験上、信頼を高めます。もし同じ人が後日、違う案件で私に相談してきたらいい兆候です。これを何度か繰り返していると相手はファンになってくれているかもしれません。

一人のファンは複数の仲間を連れてきてくれます。どの案件も他と同じように肅々と的確にスピード感をもって対応を続けていきます。そうすると「私」のファンは更に増えます。そして複数のファンは集団を連れてきます。気がつけば研究するときには事前にあそこに聞きにいけ、という文化が出来て来ます。そうして研究チームや医局に組み込まれてくると、自然と支援実績も増えていきます。その頃にはいろんな研究者と対等に話ができるようになっていくと思います。

しかし悲しいことに副作用も起きて来ます。相手にすらしてもらえなかったときを思えば頼りにしてもらえないのは本当にありがたいのですが、今度はこちらの時間がなくなってきました。あんなにタイムリーにレスポンスしてたのに一週間、二週間…と反応が悪くなって督促に追われる日々が始まります。あいつは対応が悪くなった、なんて言われたりもするでしょう。私の気持ちは、はじめのときから1ミリも変わっていないのですが、シンプルにキャパを迎えます。

## 9.2 統計家の「幅」と「奥行」

私はグローバル製薬企業の医薬品開発部門の統計担当として日々業務にあたっています。主な業務は、開発業務に焦点を当てると、日本での開発プロジェクトチームの一員として、日本における薬事申請に向けた業務を行っています。より具体的には、例えば日本で実施する臨床試験の計画から総括報告書作成までの一連の業務、国際共同開発に日本から参画する機会の探索や議論、そして薬事申請に向けた準備から承認までの業務が挙げられます。ときには開発戦略の立案の中で国際共同治験の計画に参画することもあります。その機会は多くありません。国際共同開発という文字通り「国際共同」を反映した構想など、臨床試験周辺の方法論の発展や経験の蓄積による医薬品開発環境の変化は、患者により良い治療選択肢を早く届けるという究極的な主題に対する解を与えるため、これまで医薬品開発に携わる多くの

信頼できる同僚がいればお願いしますが、一人部署だとそれも出来ません。

こういうときは予め初回相談時に、いつ頃にどうしようと思っている案件なのか聞いておき、もし時間に余裕があれば忙しいことを伝えて相手にも理解してもらって一手間は誤解を避けるのに有用です。ただし、本当に怖い人は待ってられません。私も怖い目に何度か遭いました…

しかしそんな失敗があっても、一生懸命やっただけの解析を使って一緒に作った研究が論文になり、依頼者から感謝されたときの成功体験だけは他に代え難いものがあります。アカデミアにおける統計支援は泥臭いことが殆どで、正直しんどいことも多いですが、これからも自分が頑張ることで喜んでくれる方が少しでもいる限りは続けていきたいと思っています。

最後に、元久留米大教授であった角間辰之先生とのエピソードを一つご紹介して終わりたいと思います。私が学生の頃、角間先生から「統計コンサルで、どう考えてもそのデータでは言いたいことは言えないとき、どう答える？」と聞かれました。私は、相手にこのままではできないと言うと思います、と答えました。すると角間先生は「統計家はできないといったら終わりだよ、まずはニコッと笑ってイエス、さあどうします？だよ」と言われました。あれから十数年経ち、その意図するところが自分なりに理解出来てきたような気がします。本当に世の中難しいことがたくさんですが、だからこそ笑顔を決やさずにチャレンジしていきたいと思っています。

### 藤井 陽介（ファイザーR&D 合同会社）

人々の経験および英知を結集した結果起こった変化です。この環境の変化の中で、グローバル製薬企業の日本のプロジェクトチームの一員として自分がどのように貢献できるのかと、考えてしまうこともあります。

一方、改めて私の業務を振り返ってみると、前述した弊社内で進める開発業務に留まらず、大学および研究所との共同開発のプロジェクト、また育薬に関連した業務として、製造販売後データベース調査を中心とした製造販売後調査、メディカル・アフェアーズ担当者と協業したリアルワールドデータを用いたチャートレビューなど、医薬品にまつわるエビデンス創出の機会の幅を感じさせる様々な経験をさせていただいています。このような経験を通じて感じていることは、統計の「中核」となる基礎的な知識を持つことは当然ですが、その中核から派生し知識の「深さ」を経験

と共に得ると同時に、新たなニーズ・ウォンツに統計的に応える「幅」の両面を持つことの重要性です。研究の幅は、研究の根本であるクリニカルクエスチョンおよびリサーチクエスチョン、エビデンス創出の肝であるデータソースやデータ、そして統計的方法論などに現れます。私は統計学を軸とし、クエスチョンやデータソースの特性に基づく方法論に関連した貢献を期待されますが、医薬品開発で頻用される介入研究では生じることが少ない統計的問題は数知れずあり（例えば適応による交絡、観察時期や頻度の個人差）、開発業務に関連した知識・思考とは異なるものが求められ日々緊張感をもって業務に取り組んでいます。

また、このような「幅」のある業務を行っている、コミュニケーションの重要性にも気づかされます。前述のとおり、多様なプロジェクトを通じて、開発担当者のみならず、社内外で様々な方々とプロジェクトを進めていく機会が増えており、統計学を専門としない方々へその説明をすることがあります。また、医薬品情報が記載された製品情報概要などの各種資料の内容について統計的観点から助言を求められることもあります。

## 10. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

### 1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

### 2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

### 3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていなくてもノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

### 4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時には匿名も可とする。

す。統計学を専門としない方々からすると、統計学は難解で踏み込めない領域という印象、そして苦手意識を持たれる傾向にあると思います。さらに、昨今の統計的方法論の発展に伴い、方法論が複雑で難解になってきている部分もあります。その二つの壁をどう乗り越えるのか。後者に関しては、兎に角、私自身が知る・学ぶ。問題は前者であると考えます。難解という印象、苦手意識を前提として、どのように対応していくか。私自身、明確な解を持っているわけではありませんが、私が心がけているのは、相手の目線に立ったコミュニケーション、リテラシーとしての統計学の普及、そしてこのような活動を通じて信頼を得ることです。これは「中核」、「深さ」、「幅」に対して「奥行」の部分ではないかと考えています。

「患者さんの生活を大きく変えるブレークスルーを生み出す」、これは弊社の企業目的です。医薬品を患者に確実に提供し、機敏で信頼される統計のプロフェッショナルとして、私の専門性を最大限に発揮することが、私のミッションであると考えています。

## 服部 聡、五所 正彦（編集担当理事）

### 5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABESに掲載された論文の著者（単著でなくても第1著者かそれに準ずる者）で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近、履歴書の賞罰欄に「なし」と書く公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。



また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。これまで著者から論文掲載料をいただけてきま

したが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

## 11. 2022年度 日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い

大森 崇、松山 裕（学会賞担当理事）

一般社団法人日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。この中で、日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は、会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を推薦し、日本計量生物学会賞受賞者は理事会の承認により、また功労賞受賞者は理事会での協議のうえ社員総会の承認により決定されます。

今年度も、会員の皆様に日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いする時期となりました。自薦、他薦いずれも受け付けますので、宜しくご推薦お願い申し上げます。

日本計量生物学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

日本計量生物学会賞：顕著な研究成果を発表した学会員に対する賞  
功労賞：本学会への貢献が大きかった学会員に対する賞

下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞いずれも学会賞選定委員会宛、あるいは学会賞担当

理事に郵送または電子メールにてお送りください。受賞者の発表と表彰は5月の会員総会で行います。いずれの賞もニュースレターなどで受賞理由を公表いたします（推薦者は非公表です）。

推薦書の様式：A4版1枚に、日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と14ポイントで書き、本文は10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名、所属、連絡先（住所、電話、e-mail）
- 2) 推薦理由（略歴含む）
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名（複数の場合は全員）
- 5) 推薦者（複数の場合は代表者）の所属および連絡先（住所、電話、e-mail）

推薦締め切り期日：2022年1月31日（必着）  
推薦書送付先：〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階  
（財）統計情報研究開発センター内  
一般社団法人 日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会

## 12. 編集後記

11月に入り、急に日が落ちるのが早くなってきました。新型コロナウイルス新規陽性者数も急速に減少し、日常が少し落ち着きを取り戻しつつあるように感じます（海外の様子をみると楽観視はできなさそうですが…）。

今年のノーベル経済学賞では、因果推論の発展に貢献された Imbens 先生、Angrist 先生の受賞が発表されました。2019年に続いて、計量生物学と関連のある分野の受賞に喜ばれた方も多いかもかもしれません。一方で、なぜ Rubin 先生は受賞できないのか、因果推論の発展ではもっと計量生物学の貢献が取り上げられてもよいのではないかと、といった議論もあるかもしれません。

2000年のノーベル経済学賞の発表の際にも、同様の議論がありました。2002年のIBCでBreslow先生が会長講演としてこの話題を取り上げ、講演録が Are statistical contributions to medicine undervalued? (医学に対する統計学の貢献は過小評価されている?) というタイトルで Biometrics に掲載されています。ノーベル賞のみならず、新型コロナウイルスの影響もあり、世間的に疫学や統計学が注目される今、改めて一読の価値があるように思いました。

さて、2021年も残すところ1カ月余りとなりました。今年も多くの方にご寄稿いただき、本当にありがとうございました。日本計量生物学会では、



年始早々から計量生物セミナーを開催予定です。  
来年も学会への積極的なご参画をお願い申し上げます。  
少し早いですが、会員の皆様にとって良

い1年となることを心より祈念いたしております。

(銀杏が色付き始めた本郷より)

日本計量生物学会会報第 137 号  
2021 年 11 月 26 日発行

発行者: 日本計量生物学会  
発行責任者: 松井茂之 編集者: 船渡川伊久子, 大庭幸治